

北東アジアの平和のために過去を学び未来を考える

2017年/北東アジア平和と友好の旅

韓国を経て中国綏芬河から陸路ロシアへ

韓・中・露 三国をつなぐ旅



DMZ(非武装地帯)



牡丹江・東寧・綏芬河



ウラジオストク

=感想文集=

2017年6月15日(木)～20日(火) 6日間



6/19 ウラジオストク駅

企画・実施

日本中国友好協会大阪府連合会 日本コリア協会・大阪 大阪私学退職者の会

協力

JU 観光旅行友の会

第3回北東アジア平和と友好の旅に参加して

副島 昭一さん

この企画旅行には一昨年、昨年に引き続き3回目の参加である。旧ソ満国境一帯は歴史的にも重要なところで文字の上ではよく見る場所であるが、今まで足を踏み入れたことがなかったので、今回の企画はありがたかった。

最初の訪問地は韓国の非武装地帯である、共同警備区域（JSA）のある板門店はずでに訪れていたもので、今回非武装地帯の別の場所に行けたのは幸いだった。北朝鮮が掘り進んできた南侵トンネルの本坑までトロッコで下りながら、改めて南北対立の現場が首都のすぐ近くにあることを実感した。ガイドさんが北朝鮮が掘った証拠として、水の流れからみて北が高いこと、壁を石炭で塗って炭鉱に見せかけていることおよび掘削の跡からみて、北朝鮮側が北から南に掘り進んでいることが分かることを強調していた。

暗いトンネルから外に出ると土産物屋も含めていかにものどかな観光地風景で、現在北朝鮮との関係が非常に緊迫した状態にあることをみじんも感じさせない。ミサイル飛来危機感を煽り、政権批判の矛先をそらす企みが進行し、現にこのツアーでも10人のキャンセルを出している日本とは対照的である。

韓国のガイドの盧さんは文在寅現大統領支持の自らの政治的立場をはっきり表明していた。私たちのツアーの目的や性格をわきまえた上での発言かもしれないが、朴前大統領を退陣に追い込んだ韓国民衆の力の一端をかいま見る思いであった。

※

※

※

仁川から飛び立った飛行機は3時間足らずで牡丹江に着き、牡丹江および周辺の東安、東寧の各地をめぐる。この地域こそかつて日本から開拓農民が送り込まれた一つの中心であった。特にソ満国境に近いこの土地で開拓民たちは満洲国防衛の役割も担わされることになる。広大な農村をバスで走りながら、国策により異境に送られた人々、この土地から農地を奪われた中国の人々、満洲国の支配に抵抗して武装闘争を展開した抗日聯軍の兵士たちの運命に思いを馳せた。ソ連の参戦によりソ連軍はこの地域から満洲国に進入し、開拓団の人々、そして『ソ満国境15歳の夏』で描かれた新京一中の生徒たちの苦難の逃避行の舞台もこの地であった。

途中の畑には今の季節、大豆、ジャガイモ、トウモロコシ等が見え、またキクラゲの栽培も目についた。ちょうど田植えが終わったばかりの水田も多く、日本と時期的には一致するようだ。大阪からみればかなり北の方なので少しは寒いかと予想していたが、ほとんど気温の差を感じなかった。黒竜江省の米は日本米には及ばないが中国で一番おいしいとガイドさんが言っていたのが印象に残った。

かつて牡丹江神社があった北山公園には「牡丹江抗日戦争及び愛国自衛戦争殉難烈士記念碑」が建てられている。「1947. 9. 18」と碑銘の上部に大書してあり、碑文に「中華民国三十六年九月一八日」と記してあるのも建立が中華人民共和国成立以前であることが一目瞭然と興味深い。この時期、国民党との内戦で東北北部を拠点に全国制覇を目指していた共産党が、この地域を支配した時期にあたる。9月18日はおそらく満洲事変の始まりとなった柳条湖事件の勃発した9月18日に因んだと考えられる。建立当時この戦争をこの地域では「蔣賊が汪逆に替わりアメリカ帝国主義と結託して東北を植民地に陥れ」（蔣賊は蒋介石、汪逆は汪兆銘）ようとしており、その攻撃から中国を守る戦争と見なしていたことが碑文から読み取れる。この碑の題にある「愛国自衛戦争」とはそういうことだったのかと碑文を読んでみて初めて分かった。

東寧の大規模軍事要塞は関東軍が対ソ戦を本格的に準備していたことを示すものであった。たてこもった日本軍兵士は敗戦を知らずに戦闘を続け「第二次世界大戦最後の戦場」といわれた（要塞前の石碑）。要塞内部の見学に時間をとられ、要塞博物館の閉館時間を過ぎていたにもかかわらず、入場を認めてくれた博物館当局者の特別な計らいには感謝したい。工事のために中国人の「勞工」が駆り出され、工事中多数の犠牲者が出たことも要塞博物館の展示に示してあり、また別の史料によれば「従軍慰安所」も設置されていたという。

国境の街綏芬河については30年以上前に中国海関（税関）や日本領事館について調べたときから印象に残っていた地名であったので、今回は未見の旧知に会いに行く心地であった。旧日本領事館は時間の関係でそばを通り過ぎただけで写真を撮る余裕がなかったが、大分きれいに保存されている印象であった。後日平松さんにご自身が3年前に撮った写真を送っていただいたのはありがたかった。翌朝ホテルを出た直後バスの車窓から「綏芬河口岸」の看板がちらっと見えた。まったく気づいていなかったが、ホテルは対口貿易場所のすぐ近くだった可能性がある。とすれば、海関の建物も近くにあった

のかもしれない。朝早く起きて散歩すればよかったと後悔した。

先頃中国に行ったとき、早朝ホテルの近くの公園で太極拳をやっていたので、思い切って参加してみた。初めての体験であった。今回もその機会があればと期待したが、残念ながらホテルの近くにはそれらしい公園がなく、練習できなかったのは若干心残りであった。

※

※

※

ロシアに足を踏み入れたのは今回初めてである。国境の駅グロデコボでの入国手続きが予想外に手間取り、出発が大幅に遅れ、昼食は午後6時をまわっていた。こんな遅い「昼食」は初めてである。私たちが入ったこの沿海州地域は、満洲国時代の間島地方と隣り合わせのところである。満洲国支配に抵抗した抗日聯軍主力は、関東軍の厳しい鎮圧作戦により国境を越えてこの地域に逃れ、満洲国内と連絡を取りながら抵抗を続けていた。後に北朝鮮の支配者となる金日成も当時指導者としてここで活動していた。そして抗日聯軍の第2の司令部がウスリースクにあった。私たちが遅い昼食をとったウスリースクである。実はウスリースクの司令部については帰国後知ったことで、事前に知っていれば、食事だけの短かいウスリースク滞在も違った感慨があったかもしれない。

グロデコボ駅まで迎えに来てくれた男性のガイドさんが、ツアー客の前で公然とプーチン政権を批判し、ソ連時代がよかったと自分の意見を開陳したのは興味深かった。彼は9割の人々がプーチンを支持していないといていたが、本当かなと半信半疑で聞いていた。翌日の女性のガイドさんはそれについては必ずしも同意しない口ぶりであった。日本のような世論調査でもあれば見てみたいものである。

長くなるのでその他のことについては割愛したい。なお、昨年のツアーの感想も絡めたエッセーを日中友好協会発行の『研究 中国』4号に書いているので、興味をお持ちの方はご覧ください。(http://12sun.on.coocan.jp/essay/eastasia.html)